

まないように歩き、沿道で出合う、季節ごとの花に歓声をあげ、秋は一面に敷かれた枯れ葉を踏んで頂上を目指す。そんなアポイを求めて来るのである。

この「植える」という行為は、他でも同じようなことが行われている。自生している植物があるにもかかわらず、整地して、他のものを植栽している。発想が同じように思う。「植える」ことは「善」とした考えだ。はやりの「森をつくる」などという言葉のもつ格好良さに、真のものが見えなくなってしまうように思う。

アポイの花

アポイの花は、大雪山などの高山と違って夏に一斉に咲くようなことはなく、四月から十月にかけて、ゆっくり咲く。従って、すべての花の一番美しい時に出合うためには、毎週のように登らなければならぬ。花の命はほんとうに短く、はかないものだ。

私は登山のたびに、その日の目的の花をもって登る。ところが、開花は気象条件によって大きく変わり、時期が前後したり、まったく花を付けないこともありすることもあって目的の花に出合えないこともある。しかし二十年もの付き合いのなかでは、もうすべてが顔馴染みだとおもっていたのに、十月、初めての花に出合った。この季節の登山回数がすくなくだったので見落としていたのだろうか。

毎年、毎年みている花でも、見るたびにその美しさに感動するのだが、まして、初めての花に出合ったときなどは素晴らしい自然に感謝しないではいられない。

かけても、もう、その株はなかつたりする。ギンリョウソウやサルメンエビネ、アポイの固有種ヒダカソウは、その最たるものらしい。数年前に撮った株は、すっかり姿を消している。しかし、幸い生命力は旺盛のようで難にもめげず、幌満のお花畑、九合目付近、吉田山に広く分布していて、アポイの花として美しく輝いている。

アポイ岳自然観察会に参加して

北海道自然保護協会主催の「アポイ岳自然観察会」の開催は五月二三日だった。この日は朝から雨がふり、雨の中の観察会となった。新登山道を登りながら、この登山道について考えた。階段は歩きづらいため、つい両サイドを歩いてしまう。左右の草木が刈り取られているため、草花の観察が出来ないし、樹林下を好む植物が生育できない。夏は炎天下を歩くことになる。歩くたびに採石が大きな音を立て、虫の羽音や野鳥のさえずり、季節の風のささやきをかき消してしまう。そして観察会で初めて知ったことだが、草木を刈り取った後には、ヤマツツジなどを植栽してあるが、アポイに自生していない植物の移入、また自生している種類でも他地域からの移入では遺伝子レベルで問題があると言っていた。

この登山道のように新しく何かを始めるときは、必要性について十分検討してもらいたい。もし、やらなければならないものであるなら多方面から意見を聞き、それぞれの専門的な意見を熟慮してから施工すべきであると思う。また、必要であるか否かは、少数の意見が、全体の意見として言われることがある。個人は自由な意見を持っていても、公的なものの前に自由な意見はでない。



ヒダカソウ

必要なものだったとして、発注する側も、受注する側ももつと勉強が必要であろう。この場合、登山道の意味を考えて、自然を配慮した、登山者にも親しんでもらえるようなものであれば問題は少なかつたのではないかと思う。

斜面を削り取って作った道には、まもなく倒れつきそうな木が何本もある。修復作業はしばらくのあいだとぎれそうにもない。

アポイの登山者からこんな言葉をよく耳にする。「新しい道は一回通つたらもういいな。」そして旧道へと姿を消していく。この事実を制作者は何と思っ